

欧文活字書体選択の根拠を探る

後編 ナンサッチ・プレスにおける活字書体の使用

河野 三男

一、はじめに

前編（本紀要第19号、二〇一五年）では実践的解説書を基に欧文活字書体（以下、書体と略称）の選択について調べた。書体の扱い方に関する議論や解説を時代順に選び、書体選択に関する根拠となる項目をまとめた。

この後編では、二十世紀前半に英国で異彩を放った出版社が発行した書籍に的を絞る、その書体選択の特徴と根拠を抽出してみる。その出版社はナンサッチ・プレスという、この国を含む書籍愛好家の間では名の知られた小企業であり、文芸分野で優れた書籍設計の技をもって世に問うた存在だった。⁽¹⁾ その代表者は詩人でタイポグラフィのフランシス・メネル（二八九一―一九七五）であり、書籍製作における独自の理想を追求した人物である。本題に入る前段では、書籍出版社としてのナンサッチ・プレスの理念を理解することが本稿の主題を補足すると考え、この版元の特徴とメネルの見識、それに発注先の印刷所のこととも背景として若干ながらチェックしておく。

ここで検証する主な資料は、ジョン・ドレイファス著『ナンサッチ・プレスの歴史』の巻末にまとめられている記述式出版目録である。⁽²⁾ ここには各出版物について、発行順の番号とともに以下の記述がある。書名、著者（または編集者名）、発行地、印刷所、発行年月日、判型、ページ数、印刷部数、使用書体（主に本文用）、印刷用紙、装幀と製本、広告媒体（印刷物）掲載の出版案内記事または批評記事あるいは人物関連情報、などの項目が二段組みで九十ページにわたって紹介されている。

なお本稿では、出版物の内容はこの目録にある書名、広告文、批評文、著者などから類推するにとどめる。つまり、ナンサッチ・プレス全書籍の読了でもなく、また実物検分によるものではない。目録以外の情報は、『ナンサッチ・プレスの歴史』の本文中の関連する記述から取捨している。

二、前編との関連とメネルの理想

(一) 前編の結論と本稿との関連

前編での書体選択の根拠や条件についての結論は、次の四つの事柄にまとめられた。①印刷技術の変化・差異に伴う条件や制約、②活字書体の特徴や組版設計、③扱う文章の量と主題、④印刷用紙との相性（適正）。このうち後編では①と④については次のような理由で当てはまらなくなり、②と③が主要な要素の一つである。ただし、②のうち組版の多彩さまでを検分することは本稿の目的とは異なるので除外する。

①の技術では、ナンサッチ・プレスの出版活動の開始である一九二〇年代以降は、モノタイプ機を主とする金属活字による組版とその活字版印刷が主流であった。組版方式は活字自動鑄造植字機の時代へと移っていた。また、印刷業界では一九五〇年代からコールド・タイプすなわち写植の時代に突入したといえ、ナンサッチ・プレスではとりわけ前期では金属活字にこだわった跡が見られる。したがって、ここでは技術の変化・差異は考慮外である。

④の印刷用紙との相性では、ナンサッチ版の書籍を十分に実見できる機会がないために、調査検分は難しい。出版目録では用紙の記述は見られるが、実物に触れられないために、活字との相性・適性などの検証は割愛する。だが、メネルが書体と用紙との関係に配慮しないと考えることはありえない。

(二) メネルの見識

フランシス・メネルは書体の選択において独自の判断があった。彼は生まれ育った環境が父親の仕事場の印刷工場であって、根っからの印刷人であり、書体についての知識と実践が豊富で、タイポグラフィとしての使命感と熱意に満ちていたことから、十分な見識を有しており、それが書籍製作で生かされたことは言を俟たない。彼の父親ウィルフリッド・メネルはバーンズ・アンド・オーツ社を経営して自らの意見を表明する媒体を自営していたことから、また母のアリスは詩人で自らも月刊の詩集の編集・発行を担っていたので、息子のフランシス・メネルは言論発信や詩歌・文芸という、どちらも言葉への繊細な態度や印刷者としての志それに倫理など、両親から多くの影響を受けた。加えて活字を扱う組版設計でも、自著などで明確な意見を披露していることから、一定の判断基準が生かされていたことは想像に難くない。

彼による書籍製作に対する態度は、その著『イギリスの印刷本』⁽³⁾とジョン・ドレイファス著『ナンサッチ・プレスの歴史』⁽⁴⁾に詳しい。以下の彼の言葉からその真摯な姿勢や理想とする実践方針を見てみる。

「可読性とは、十分に油が注がれたベアリングのことで、意味という車輪をギーギーと音を立てずに回転させるものだ」

「言葉についての様々な表し方が可能な限りある。著者の言葉を肉体化することだ」

「書物の物理的な心臓や頭部は、印刷されたページにある」

「我々の役に立ち、我々を救うのは、活字である」

「(新聞の)印刷は偉大な記録者だ。書類は残り続け、その証拠はいつでも入手でできて、記事は歴史となる。証拠を隠すことは難しいし、印刷は究極の言葉を有することに至る。つまり鉛でできた二十六の兵士で、私は世界を征服したと」

「書物は分かりやすくあるべきで、書き手の目的への誠実な奉仕である」

「書物は読まれるだけのものではなく、尊重・評価されるべきでもある。言い換えれば、書物は分かりやすくあるべきで、書き手の目的・意図への誠実な奉仕である。また、読みやすいことが必要だ。時として書き手の意図を増幅したり、あるいはそれ自体の不可欠な形態へと接近するなどだ」

「ささやかながらも印刷という男勝りの三つの女神を眺めてみよう。それは分かりやすさ、読みやすさ、そして装飾だ」

「理想を言えば、文章の一行は八から十一単語であるべきだろう」

「派手に着飾った書物ではなく、絶妙にして的確に、出しゃばることなく書物への思いで身をまとった書物を欲しているのだ」

ここに引用した「男勝りの女神」の三番目の装飾は、ナンサッチ・プレスの特徴の一つである「隠喩に富んだ印刷(alusive printing)」を理解するには好例である。この言葉はメネルが尊敬するアメリカ人ブルース・ロジャーズ(一八七〇—一九五七)が既に唱えていた。この隠喩とは書籍製作全般のデザインつまり装幀、製本材料、扉などと、書体選択でも発揮される。例えば装飾とはただ眼をひくものでもやたらに飾り立てることでもなく、メッセージの内容や背景を暗

示して、それを読み手と共有・共感したり気づかせたりする工夫である。そこにこそ装飾の意図がある、とメネルは考えていた。その意味で装飾は、書き手の意図を妨げない程度に何かを付加するあるいは増幅するという「創造的機能性」とも呼ぶべき配慮を期待されている素材でもあった。読者が模様や図柄を目にして、紙面に独特な印象深い表情や心理的な立体感を与えられる楽しみとでも言えよう。この種のオーナメント類の扱い方には組版技術や創造力が必要とされ、そのパターンを選んだ根拠も試される。花形装飾活字などは、その意味でタイポグラフィにとつての腕の見せどころであり、創造性をかき立てられる素材であるはずだ。

他方でドレイファスは、メネルが一九二三年に発行した活字見本帳の奥書から以下のような文章を引用している。⁽⁵⁾

あるべき活字とは、次のように常識以前のことである。

- ① 何はさておき、読みやすいこと。
- ② 確かめうる規範、美、または(そして)伝統に従うこと。
- ③ できるだけ明瞭であること。
- ④ 印刷された言葉の意味に対して、(活字の)特色がふさわしいこと。
- ⑤ 飾り野や図版と調和する「濃淡」であること。
- ⑥ 決められた印刷工程と決められた紙によって効果のある再生が可能なこと。
- ⑦ (常識的な心理学の言葉を使う) 読者の心の中で正しい連想を確立すること。

ここにメネルの書籍製作にかける熱くかつ冷静な姿勢の均衡の程が十分にうかがえる。ナンサッチ版の書籍の全てがこのような理想を具現しているかどうかは定かではないが、少なくともその意気込みと質の維持に懸命であったと想像できる。同社の設立に際して「中身の重要性、体裁の美しさ、適正な定価という三つの理想に従って中身を選んで製作することにある」という確固たる意志が、一九二三年の設立直後の出版案内の中で表明されている。⁽⁶⁾

なお、日本ではこの時期にすでに一人の詩人がナンサッチ・プレスに注目していた。『游牧記』を残した天折の詩人・平井功がメネルに手紙を送り、その書籍製作について質問していたと聞いている。日夏耿之介や庄司泉水らの愛書家

たちが平井にナンサッチ版の魅力について教えたとみられる。平井には組版への意欲的な挑戦に込めうる印刷所の選択などに関して、困難や悩みがあったかと伝えられている。

そしてドレイファスは活字の機能に関する、次のようなメネルの言及を紹介している。

文字のプロポーシオンにおいて美しさに「純粹な」基準というものがあるという考えに傾いたが、その種の美しさの代わりとなる最も有効で実証できるものがある場合には、殊の外難しく疑いがあることに四苦八苦する必要はない。これは用の美 (Beauty of utility) という見解であつて、伝統と慣習への尊重でもある。(略) 印圧の鋭さ・明快さ、曲線と結合部、極微での正確さと安定感、目の歪み(人の目は実測上の中央を下に見るし、これは知られてゐる)への考慮、文字が満足のゆくようにつながり、語を形成し、文字が示されたときの媒体のための感覚——金属、石、インク——それとそれを作つた道具への配慮、あの活字この活字これらのすべてが技術上の完璧な現れであり、現段階で美の定義であるかどうかの判断のための実際上の試しとなるのである。(7)

「用の美」あるいは「用と美」とは、我が国で柳宗悦が唱えた民芸運動でのキーワードの一つであるが、その契機は十九—二十世紀のイギリスで起きたアーツ・アンド・クラフツ運動にあつた。メネルもその時代の空気を十分に吸つていたことと無関係ではありえない。ただし、工芸作家W・モリスが辿り着いた書籍製作の態度は、タイポグラフィの理解の深さにおいてメネルには及ばない。書き手への寄り添い方や意識がモリスには弱いことでその結果はアートの傾き、逆にメネルは真のデザインに没入できた。

(三) 発注先の印刷所

ナンサッチ・プレスから印刷を受注した企業について見てみる。明記されている社名の総計は三十六社ほどあり、受注した点数からみて上位十社だけで百二十九点を印刷している。これは全体の七十%ほどにあたる。受注印刷所を「三十六社ほど」としたが、これは「私的に印刷」という自社内での作業を推測

できる記述があり、ナンサッチ社内でも印刷されたか同族関係の印刷工場によるものと思われるが特定できず、実態が曖昧であるという理由による。

業者名の内訳は、ウィリアム・ブレドン・アンド・サン社が二十二点、R・Rクラーク社が十九点、ウィリアム・クロウズ・アンド・サンズ社が十四点、ロバート・マクレホウズ社が十三点、キノック・プレスが十二点、オックスフォード大学印刷局が十一點、ケンブリッジ大学印刷局とファンフェア・プレスが各十點、ヘリティッジ・プレスと私的印刷所が各九點である。海外発注はアメリカとフランスにあり、前者はヘリティッジ・プレスと、クイン・アンド・ポードン社、レオ・ハート社で、後者はプロタ印刷社である。

次にこれらの印刷所が受注した書体の特徴を眺めてみる。ウィリアム・ブレドン・アンド・サン社はキャズロン書体とプランタン書体での組版と印刷を主に受注しており、その他に四書体の使用が記録されているR・Rクラーク社はスコッチ・ローマン書体とバスカヴィル書体それにタイムズ・N・R書体の使用が多い。ウィリアム・クロウズ・アンド・サンズ社はモノタイプ社と関係が強く、メネルから七書体の仕事を受注し、ナンサッチ版プランタン書体という特注書体の使用が四點ある。ロバート・マクレホウズ社は七書体を指定され、タイムズ・N・R書体をもっとも多い。キノック・プレスは六書体での印刷を受注し、モノタイプ社版ギヤラモン書体(ジャンソン系で、ギヤラモン書体の模倣の複製版)とベンボ書体での組版受注が際立つ。オックスフォード大学印刷局は十一點で三書体の使用を受注し、その内で同印刷局が歴史的遺産として所有する十七世紀前半のフェル書体の母型から鋳込んだ活字を七點で使用した。ケンブリッジ大学印刷局は九書体で十點を印刷しているし、ファンフェア・プレスには特徴ある書体はみられないが、ガウディ・モダン書体が目を引く。アメリカの印刷所であるヘリティッジ・プレスは特に多く使用している書体はなく八書体であるが、一書体で明記がない。私的印刷所はジャンソン書体で半分の四點を印刷している。フランスのプロタ社ではコシヤンとフルニエの二書体での印刷を受注し、クイン・アンド・ポードン社とレオ・ハート社で合わせて四點を印刷し、全てコシヤン書体で印刷している。両書体はフランス生まれで、その複製版活字である。

これら以外で我々に馴染みのある印刷所をあげておく。オリヴァ・サイモンが携わっていたカーウエン・プレス、オランダのハーグにあったヨハネス・エ

ンスヘデ社、キャズロン書体を復活させたウイティンガム運営のチジック（チズウィック）・プレスなどがある。活字書体とその組版の要望に応えうる印刷所が指定されていたと考えられることから、希望書体を備えている印刷所を選んでの発注だろう。

本文の組版と印刷を分けて発注したこともあるので、印刷所が全て先にあげた書体を備えて組んでいたのではないことに留意が必要であるが、その方法はここでは省く。

ナンサッチ・プレスは出版業社であり、メネルは主に編集とデザインを担当していた。彼が活躍した期間は第二次大戦の前までで、その後はアメリカ人に経営が委ねられた。その歴史の前半の運営と書籍製作の主体はメネルであり、その意志は助言などでその後の経営陣に継続されたとはいえ、実際の書籍デザインは変わらざるを得なかっただろう。それにしても、ナンサッチという名称を普及させた功績はメネルのデザインの感性和と文学およびタイポグラフィの才能・知識にあることは疑いない。さらに人的交流の広さもあり、その条件から生み出された書籍の外部と内部の質の高さや豊かさは、並びのない光彩を放って人気を得ている。以上のことを念頭に、次にナンサッチ・プレスの書体使用状況の全体像を概観してみる。

三、使用書体の特徴と概略

(一) 活字の供給

ナンサッチが書籍本文の組版・印刷を外注した時代は、二十世紀前半の半世紀ほど（一九二二—一九六八年）の期間である。それはモノタイプ式とライノタイプ式の自動鋳造植字機による金属活字での機械組版が全盛を誇っていた時代である。さらに、ナンサッチが選択した書体はスタンリー・モリスン（一八八九—一九六七）との関係を無視できない。モリスンはメネルの若い頃からの友人であり、当時モノタイプ社で活字書体復刻計画の指揮を執っていた。メネルが選んだ書体の大多数がモノタイプ社製の活字であったことから、相互の理解と友情が友好裏に働いたことが伝わっている。例えばジョン・ドレイファスは「モリスンの存在によりランストン・モノタイプ社から（ナンサッチへ）引用者」の特的な文字種の調達が可能になった」として、下図に見られるように大文字を低くさせたりアセンダーやディセンダーを長くさせたりするなどの工夫が要請され

た事実を報告している。⁽⁸⁾ これはプランタン書体のことを指している。また、ライノタイプ社版のバスカヴィル、スコッチ・ローマン、グランジョン、ギャラモンなどの一部の書体や、手組み用のジャンソンなども選ばれている。とりわけジャンソン書体は十二点で使用され、そのうち手組み用七点、ライノタイプ社版が三点、不明が二点と、手組み用にナンサッチ版として修正文字種を含む書体が使用されている。

(二) 使用書体の数

メネルおよび彼の後継者が書籍ならびに小冊子で選んだ本文用書体の一覧は表1に示す通りである。全発行書名数一九四で、記載不明を含めて三十一種類の書体が使用されたが、書名数は一四二点で、シリーズであるが異なる内容であれば一点と数えた。同一書名で複数書体の混植と書体名の不明があるために、書名数よりも多くなっている。

主要選択書体については、上位十書体で百三十二点を組んでおり、その割合は六十八%で七割近い。ちなみに上位五位までの六書体で、全体の五割を超えている。この場合、本稿の基になる文献であるドレイファス著『ナンサッチ・プレスの歴史』も同じナンサッチ発行であるが、そこに使用されている活字のバルブ書体はこのリストから除外している。

また、表一の使用書体のうち使用開始年と活字製造年に注目すると、興味あることが見られる。バルマー書体は製造と同年に、ギャラモン書体とグランジョン書体は翌年に、バスカヴィル書体とベンボ書体とガウディ書体は二年後に、それぞれ使用されている。メネルがいかに新しい書体の出現に敏感だったかを物語る。これらからライノタイプ版グランジョン書体を除く五書体は、全てモノタイプ社版である。ちなみに製造後三年での使用はポリフィラス書体とそのイタリック体の別名ブラドール書体である。

ggjippqqyy ffggjppyy bbddffhkkll Qu

プランタン書体の比較：同じ文字で左がナンサッチ版、右がモノタイプ版。

表 1: 本文主要書体の一覧

順位	書体名	使用数	割合(%)	使用期間(年)	活字製造年*	MT外の製造	供給所名
					製造所(MT)		
1	キャズロン(Caslon)	26	13.40	1923 - 38	1916 (13)	?(13)	
2	プランタン(Plantin)	19	9.79	1923 - 55	1913 (19)		
3	ギャラモン(Garamond)	16	8.25	1923 - 53	1922 (10)	1924 (2) 1917 (4)	LT ATF
4	タイムズ(Times New Roman.)	15	7.73	1939 - 53	1932 (13)	1932 (2)	LT?
5	バスカヴィル(Baskerville)	12	6.19	1925 - 39	1923 (10)	1923 (2)	LT
	ジャンソン(Janson)	12	6.19	1926 - 39		1937 (3) 1919 (9)	LT Stempel
6	スコッチ・ローマン(Scotch R.)	10	5.15	1925 - 35	1920 (8)	?(2)	?
7	コシャン(Cochin)	8	4.12	1931 - 44	1923 (8)		
8	ベンボ(Bembo)	7	3.61	1931 - 64	1929 (7)		
	フェル(Fell)	7	3.61	1923 - 37		1672 (7)	OUP
	小計	132	68.04		88	44	
9	ボドニ(Bodoni)	6	3.09	1926 - 36	1922 (5)	?(1)	?
10	エアハルト(Ehrhardt)	5	2.58	1950 - 68	1937 (5)		
	フルニエ(Fournier)	5	2.58	1929 - 63	1925 (5)		
	パペチュア(Perpetua)	5	2.58	1936 - 51	1929 (5)		
11	ガウディ・モダン(Goudy Mod.)	4	2.06	1930 - 53	1928 (4)		
	ポリフィラス(Poliphilus)	4	2.06	1926 - 33	1923 (2)	?(2)	?
12	ブラド(Blado = Poliphilus italic)	3	1.54	1926 - 28	1923 (2)	?(1)	?
	グランジョン(Granjon)	3	1.54	1932 - 39		1928-31 (3)	LT
	インプリント(Imprint)	3	1.54	1932 - 56	1912 (3)		
	ワルバウム(Walbaum)	3	1.54	1926 - 39	1933 (1)	1919 (2)	Berthold
13	バルマー(Bulmer)	2	1.03	1937 - 45	1937 (1)	1928 (1)	ATF
	セントール(Centaur)	2	1.03	1934 - 56	1929 (1)	1929 (1)	LT
	ダンテ(Dante)	2	1.03	1965 - 68	1957 (2)		
	フライシュマン(Fleischmann)	2	1.03	1928 - 34		1929 (2)	Enschede
14	ベル(Bell)	1	0.52	1936	1930 (1)		
	アリギ(Arrighi = Centaur italic)	1	0.52	1934	1929 (1)		
	カレドニア(Caledonia)	1	0.52	1945	1938 (1)		
	ルテシャ(Lutetia)	1	0.52	1934		1925 (1)	Enschede
	ノイラント(Neuland)	1	0.52	1924		1923 (1)	K'spore
	ロムルス(Romulus)	1	0.52	1954		1931 (1)	Enschede
	ファン・ダイク(Van Dijck)	1	0.52	1928	1935 (1)		
	小計	56	28.87		40	16	
	不明書体	6	3.09			6	
	鑄造所別小計				128	66	
	30書体の使用合計数	194	100.00				

*()内は使用数。特に明記ない場合は、MT(モノタイプ社)を表す。

** LTはライノタイプ社、AFTはアメリカ活字鑄造会社、BTはベルトルド社、Sはシュテンベル社、Bはパウアー社。
 活字製造年は製造完了年か発売年かにより、1年程度の差異がある。

ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTUV
abcdefghijklmnopqrstuvwxy
1234567890
*ABCDEFGHIJKL**MNO**PQRSUVX*
abcdefghijklmnopqrstuwxvxyz
1234567890
MONOTYPE PLANTIN
プランタン、MT Plantin

ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTUVWXYZ
abcdefghijklmnopqrstuvwxy
*ABCDEFGHIJKL**MNO**PQRSUVWXYZ*
abcdefghijklmnopqrstuwxvxyz
CASLON OLD FACE
キャズロン、Caslon

ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTU
VWXYZ
abcdefghijklmnopqrstuvwxy
1234567890
*ABCDEFGHIJKL**MNO**PQRTW*
abcdefghijklmnopqrstuwxvxyz
1234567
COCHIN LUDWIG & MAYER
コシャン、Cochin

ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTUVWXYZ
abcdefghijklmnopqrstuvwxy
1234567890
*ABCDEFGHIJKL**MNO**PQRSUVWXYZ*
abcdefghijklmnopqrstuwxvxyz
1234567890
MONOTYPE GARAMOND
ギャラモン、MT Garamond

ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTUVWXYZ
abcdefghijklmnopqrstuvwxy
1234567890
*ABCDEFGHIJKL**MNO**PQRSUVWXYZ*
abcdefghijklmnopqrstuwxvxyz
1234567890
MONOTYPE SCOTCH ROMAN
スコッチ・ローマン、Scotch Roman

ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTUVVW
abcdefghijklmnopqrstuvwxy
1234567890
*ABCDEFGHIJKL**MNO**PQRSUVWXY*
abcdefghijklmnopqrstuwxvxyz
STEMPEL JANSON
ジャンソン、Stempel Janson

ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTUVWXYZÆ
ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTUVWXYZÆ
abcdefghijklmnopqrstuvwxyæœ
1234567890
& ff fi fl fm fn fo fi fl ft ffi
FELL ROMAN
フェル、Oxford Fell

ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTUVWXYZ
abcdefghijklmnopqrstuvwxy
1234567890
*ABCDEFGHIJKL**MNO**PQRSUVWXYZ*
abcdefghijklmnopqrstuwxvxyz
1234567890
TIMES NEW ROMAN
タイムズ・ニュー・ローマン、MT Times New Roman

ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTUVWXYZ
abcdefghijklmnopqrstuvwxy
1234567890
*ABCDEFGHIJKL**MNO**PQRSUVWXYZ*
abcdefghijklmnopqrstuwxvxyz
1234567890
BEMBO
ベンボ、MT Bembo

ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTUVWXYZ
abcdefghijklmnopqrstuvwxy
1234567890
*ABCDEFGHIJKL**MNO**PQRSUVWXYZ*
abcdefghijklmnopqrstuwxvxyz
1234567890
MONOTYPE BASKERVILLE
バスカヴィル、MT Baskerville

表2: 書体別、著者とジャンル(使用数上位10書体)

表2-1: キャズロン書体

ジャンル	著者・内容の年代(世紀)					計
	古代	16-17	17-18	18-19	19-20	
戯曲/歌謡/詩歌		1	5	1	3	10
小説/物語		1	1	1	1	4
随筆/評論				2	2	4
宗教	1					1
その他/不明				1	3	7
小計	1	2	6	5	9	26

表2-2: プランタン書体

ジャンル	著者・内容の年代(世紀)					計
	古代	16-17	18-19	19-20	不明	
戯曲/歌謡/詩歌			1	9		10
小説/物語				1	1	2
随筆・小論/評論	1			1		2
宗教	2					2
その他/不明		1		2		3
小計	3	1	1	13	1	19

表2-3: ギャラムン書体

ジャンル	著者・内容の年代(世紀)					計
	古代	16-17	18-19	19-20	不明	
戯曲/歌謡/詩歌	1	3		1		5
小説/物語	1		2	3	1	7
宗教/哲学	1	1				2
その他/不明	1			1		2
小計	4	4	2	5	1	16

表2-4: タイムズ・ニュー・ローマン書体

ジャンル	著者・内容の年代(世紀)					計
	17-18	18-19	19-20	不明		
戯曲/歌謡/詩歌	1	3	2			6
小説/物語			1	1		2
自然科学				1		1
随筆・小論/評論	1	1	1	2		5
その他/不明			1			1
小計	2	4	5	4		15

表2-5: バスカヴィル書体

ジャンル	著者・内容の年代(世紀)					計
	16-17	17-18	18-19	19-20	不明	
戯曲/歌謡/詩歌	1	1	3		1	6
小説/物語				1	1	2
随筆/評論			1	1	2	4
小計	1	1	4	2	4	12

表2-6: ジャンソン書体

ジャンル	著者・内容の年代(世紀)				計
	17-18	19-20	不明		
戯曲/歌謡/詩歌	1	2	2		5
随筆・小論/評論	1	2	1		4
小説/物語		1			1
その他/不明	1	1			2
小計	3	6	3		12

(三) 使用書体の傾向―著者・ジャンルとの関連
 以下では発行書籍全体の七割近くを占める上位十書体について、表2と表3を基に探る。表2は著者の生没年代とジャンルとの関連、表3は著者についての判明しうる専門分野と特徴を、それぞれ書体別にまとめた。そこから以下の項目について書体選択の傾向を探る。①著者の生没年代(表2参照)、②著者の専門分野・特徴(表3参照)、③ジャンル(表2参照)、④特徴的文と書名を参考にしつつ、さらに筆者が可能な限り調べて判断した。個々の内容の背景となる年代に関してこのカタログから判断することは、記述で不明があり徹底していないために不可能である。そのように年代とジャンルでは不明を含む場合があるので、表2では別途で不明の欄を設けて示した。

表2-7: スコッチ・ローマン書体

ジャンル	著者・内容の年代(世紀)					計
	16	17-18	18-19	19-20	不明	
戯曲/歌謡/詩歌		1				1
小説/物語				1		1
随筆・小論/評論	1		2	3	2	8
小計	1	1	2	4	2	10

表2-8: コシャン書体

ジャンル	著者・内容の年代(世紀)					計
	古代	17-18	18-19	19-20	不明	
戯曲/歌謡/詩歌			1			1
小説/物語	1					1
小説(フランス)		1		4	1	6
小計	1	1	1	4	1	8

表2-9: ベンボ書体

ジャンル	著者・内容の年代(世紀)					計
	16-17	18-19	19-20	不明		
戯曲/歌謡/詩歌	2					2
小説/物語		1	2			3
随筆・小論/評論			2			2
小計	2	1	4			7

表2-10: フェル書体

ジャンル	著者・内容の年代(世紀)				計
	16-17	17-18	不明		
戯曲/歌謡/詩歌	2				2
随筆・小論/評論	1				1
宗教/哲学	1		1		2
その他/不明	1	1			2
小計	5	1	1		7

表3: 書体別・著者専門分野・特徴 (表中の番号とは、カタログの書名番号を示す)

表3-1: キャズロン書体(18-20世紀)

番号	著者名または書名中の人物名	著者の分野	特徴
10	ハドソン(W. H. Hadson, 1841-1922)	植物学者	自然主義
27・45・85	B・ダーウィン(B. Darwin, 1871-1954) E・ダーウィン(E. Darwin, 1876-1961)	絵本作家・挿絵画家 絵本作家・挿絵画家	児童文学 児童文学
36 b	ターナー(Walter Turner, 1889-1946)	詩人・小説家	評論
43・103	ブレイク(W. Blake, 1757-1827)	詩人・画家	幻想的・浪漫主義
46・88	レイヴァー(J. Laver, 1806-1872)	小説家	音楽的・絵画的
48	ヴォルテール(Voltaire, 1694-1778)	小説家・思想家	啓蒙的合理主義
66	ファルクハー(G. Farquhar, ?)	劇作家	喜劇的
67	アリス・メネル(A. Meynell, 1847-1922)	詩人(フランスの母親)	易しい言葉遣い
68	ローレンス(D. H. Lawrence, 1885-1930)	絵本作家	神秘的唯物論

表3-2: プランタン書体(19-20世紀)

番号	著者名または書名中の人物名	著者の分野	特徴
8・30	トラー(E. Toller, 1893-1939)	劇作家	反ナチ、左翼
15 a-f・123	(編集)メネル(F. Meynell, 1891-1975)	詩人・編集者・出版人	社会主義者
85	B・ダーウィン(Bernard & Darwin, 1871-1954) E・ダーウィン(Elenor Darwin, 1876-1961)	絵本作家・挿絵画家 絵本作家・挿絵画家	児童文学 児童文学
131	スティヴンスン(R. L. Stevenson, 1850-1894)	詩人・小説家	旅行作家
133	ラング(A. Lang, 1844-1912)	民俗学者	お伽話の収集

表3-3: ギャラモン書体(古代と19-20世紀)

番号	著者名または書名中の人物名	著者の分野	特徴
2	メレディス(G. Meredith, 1828-1909)	小説家・詩人・評論家	メネルの両親の友人
7	アプレイウス(L. Apuleius, 前2世紀)	作家(ギリシャ)	伝奇小説
12	アナクレオン(Anacreon, 前6世紀)	詩人(ギリシャ)	酒と恋・抒情
63	プルターク(Plutarch, 2世紀)	哲学者(ギリシャ)	博識
16・31	ムーア(G. Moore, 1852-1933)	小説家	自然主義
19	プラトン(Plato, 前4世紀)	哲学者(ギリシャ)	靈魂不滅・イデア論
107 d	ハドソン(W. H. Hudson, 1841-1922)	植物学者	自然主義
115	キャロル(L. Carroll, 1832-1898)	小説家・数学者	風刺・幻想的
117 a	バルザック(H. Balzac, 1799-1850)	小説家(フランス)	リアリズム文学

表3-4: タイムズ・N・ローマン書体(18-20世紀)

番号	著者名または書名中の人物名	著者の分野	特徴
15g・116 a・b	メネル(F. Meynell, 1891-1975)	詩人・編集者・出版人	社会主義者
94	コウルリッジ(S. T. Coleridge, 1772-1834)	詩人	浪漫主義
98	コリアー(J. Collier, 1901-1980)	小説家	悪魔
106	シモンズ(A. J. A. Symons, 1900-1941) フラワー(D. Flower, 1907-?)	伝記作家 伝記作家	愛書家 愛書家
111	メネル(F. Meynell, 1891-1975)	詩人・編集者・出版人	社会主義者
111	ホイットマン(W. Whitman, 1819-1892)	アメリカの詩人	自由詩・政治的
114	ホワイト(G. White, 1720-1793)	博物学	流麗な文体
117	バイロン(Byron, 1788-1824)	詩人	政治的・風刺的
118	シェリー(Shelly, 1792-1822)	詩人	浪漫派・無神論

表3-5: バスカヴィル書体と関連人物(17-19世紀)

番号	著者名または書名中の人物名	著者の分野	特徴
24	ブレイク(W. Blake, 1757-1827)	詩人・画家	幻想的・浪漫主義
26	ペロル(Perrault, 1628-1703)	詩人・小説家	童話も有名
41	コベット(W. Cobbette, 1763-1835)	ジャーナリスト	論争家
90	コウルリッジ(S. T. Coleridge, 1772-1834)	詩人	幻想・神秘的・浪漫派
92	モリス(W. Morris, 1834-1896)	工芸作家・印刷者	社会主義者

表3-6:ジャンソン書体(16-20世紀)

番 号	著者名または書名中の人物名	著者の分野	特 徴
36a	メネル(F. Meynell, 1891-1975)	詩人・編集者・出版人	社会主義者
44	ハーバート(G. Herbert, 1593-1633)	聖職者・詩人	形而上派
55a	メネル(E. Meynell, 1882-1926)	作家・古書店主	フランスの兄
65	フォンテネル(B. de Fontenell,)	思想家・啓蒙家	宗教批判
65a, 68a	メネル(F. Meynell, 1891-1975)	詩人・編集者・出版人	社会主義者
82	エヴリン(J. Evelyn, 1620-1706)	日記作家	?
107c	ハウズマン(A. Housman, 1859-1936)	詩人・ラテン語学者	古典・ロマン主義
114 a	ストーン(I. Stone, 1903-1989)	伝記作家	?

表3-7:スコッチ・ローマン書体と関連人物(18-20世紀)

番 号	著者名または書名中の人物名	著者の分野	特 徴
52	コンラッド(J. Conrad, 1857-1924)	小説家(ポーランド)	?
64	オースティン(J. Austin, 1775-1817)	小説家	写実主義
71a	ディケンズ(C. Dickens, 1812-1870)	詩人	諧謔的
75	ハズリット(W. Hazlitt, ?-1930)	詩人・随筆家	浪漫主義
	キーンズ(G. Keynes, ?)		?
114b	メレコヴスキー(Merejcovski, 1866-1941)	詩人・小説家(ロシア)	歴史小説

表3-8:コシャン書体(18-20世紀)

番 号	著者名または書名中の人物名	著者の分野	特 徴
72	ホーマー(J. Homer, 前8世紀)	詩人(ギリシャ)	吟遊詩人
105	コウルリッジ(S. T. Coleridge, 1772-1834)	詩人(ロマン派)	幻想・神秘的
115c	ヴォルテール(Voltaire, 1694-1778)	小説家(仏)	風刺・啓蒙合理
115f	フランス(A. France, 1844-1924)	小説家(仏)	批評的
115g	モーパッサン(G. Mopassant, 1850-1893)	小説家(仏)	自然主義
115h	ゾラ(E. Zola, 1840-1902)	小説家(仏)	自然主義・幻想的

表3-9:ベンボ書体(16-20世紀)

番 号	著者名または書名中の人物名	著者の分野	特 徴
73	シドニー(P. Sydney, 1554-1586)	詩人	ソネット形式
107b	シェイクスピア(W. Shakespeare, 1564-1616)	劇作家・詩人	警句・名句・新語
117a	バルザック(O. Balzac, 1799-1850)	小説家(仏)	リアリズム
128	メネル(F. Meynell, 1891-1975)	詩人・編集者・出版人	社会主義者
132	マクドナルド(G. MacDonald, 1824-1905)	児童文学者・詩人	?
136	ネスビット(E. Nesbit, 1858-1924)	童話作家	?

表3-10:フェル書体(16-18世紀)

番 号	著者名または書名中の人物名	著者の分野	特 徴
1・6・71・86	ダン(J. Donne, 1572-1631)	詩人	官能的恋愛詩
37	エヴリン(J. Evelyn, 1620-1706)	日記作家	警句・名句・新語
109	ミルトン(J. Milton, 1608-1674)	詩人	宗教的・幻想的
100	(編集)オールト(A. Ault, 1880-1950)	ポーブの研究者	?

■ キャズロン書体

十八世紀前半に生まれたイギリスを代表する書体で、全二十六点に使用。

① 十六から十九世紀までにも散在するが、十七から二十世紀の著者に集中傾向。

② 詩人、小説家、劇作家、植物学者、絵本作家（画家）に分けられる。ヴォルテールだけがフランス人。自然主義、浪漫主義または幻想的、神秘主義的、音楽的または絵画的、喜劇的な内容を得意とする人物などと変化に富む。重複を含めて画家が六点を占める。

③ 戯曲・歌謡・詩歌が目立つが、小説・物語や随筆・評論も多い。特徴では児童文学が顕著。

④ キャズロン書体誕生の年代は十八世紀前半であるので、著者の年代と傾向の一致は見られない。むしろ「著者の分野とその特徴」から選ばれている。強い癖が少ないことから一般的に万能的な書体として選ばれるが、ここでは哲学・宗教・社会的思想などとは縁遠いように思える。これは特徴的な選択。

■ プランタン書体

一九一三年にイギリスのモノタイプ社工場長ピアポンの主導で、十六世紀ベルギーのプランタン印刷所の活字見本帳掲載のR・グランジョンの活字をモデルに設計されたとされるやや骨太の穏やかな書体。

① 十九—二十世紀に多い。

② 劇作家、絵本作家、詩人・小説家、民俗学者に区分。著者にはドイツ人のトラーがいる。古きのかな時代を彷彿とさせる作家が目立つし、それが暗に現代社会への批判として垣間見られる内容か。主張の強さを秘める作品が多い。

③ 詩歌・韻文・歌謡に集中。古代では随筆・宗教関連でも選ばれている。十二点のうち七点はThe weekend bookという小冊子であり、田舎で働く人々が週末に読むことを想定した社交的な歌謡集または詩文集。歌やゲームを主とした生活感あふれる趣味的な内容。

④ 「ジャンル」の特徴が関係。十六世紀の著者の書名では一つ使われているだけであることから、年代に根拠があつての選択ではない。

■ ギャラモン書体

十六世紀フランスを代表する世界的に有名なギャラモン設計の活字またはそれを模倣した十七世紀の活字をモデルに、十九世紀末から二十世紀初頭に欧米各国の活字鋳造所から供給された。

① 十九—二十世紀と十六—十七世紀、それに古代の著者が目立つ。

② 九人の著者のうち、ギリシヤ人四名とフランス人の一名、計五名が外国人著者。古代ギリシヤの小説や思想を内容とするものが目立つが、伝奇小説、叙情的、風刺的、自然主義、リアリズムなど多様なジャンル。

③ 小説・物語と詩歌・韻文・戯曲に多い。

④ ギャラモン書体誕生の世紀との一致があるのは四点。ギリシヤ時代の著者が多めで、ギリシヤ時代と十六世紀と二十世紀の「著者の年代」それに多岐にわたる「ジャンル」が特徴。

■ タイムズ・ニュー・ローマン書体

一九三二年に日刊新聞用に特化して設計された書体。黒みがやや強く硬質なテクスチャを印象づける書体であるために、客観的なテキストである理工系の内容や言論・批評・ビジネスの分野に多く選ばれている。

① 十九—二十世紀が目立つ。

② 詩人・小説家が多く、その他には学者がいて、近代の著作に集中。出版人であり編集者でもあるメネル自身がまとめているものが三点。

③ 詩歌・韻文と小論・評論に集中。詩歌関連では意外な印象。社会主義や無神論などの思想性が背景にあるような傾向。

④ 随筆・評論については、現在でもジャーナリストで客観性を標榜する内容が濃厚であることから納得できる。詩歌での使用は、この書体の明快さと詩歌への過剰な感情的思い入れを意識的に抑制しているか、あるいは挑戦的試みか、興味深い選択。「著者の年代」「著者の特徴」「著作のジャンル」が平均的な要素。

■ バスカヴィル書体

十八世紀中頃に出現した書体の複製版。ここではモノタイプ社版が十点、ライノタイプ社版が二点で使用されている。後者の方がオリジナルに忠実だが、弱々しく印象が芳しくない。

① 十八—十九世紀が多い。

② 詩人がやや多いが、ジャーナリストで政治評論家のコベットもいる。浪

漫主義派が二名で、社会主義者のモリスもいて、やや古き英国への郷愁が滲む。

③ 詩歌・歌謡と小論・評論に集中。

④ 英国人気質が思い起こされるような内容が集まっているのか。書体誕生の時代と一致。「著者の年代」と「著作のジャンル」が影響。

■ ジャンソン書体

ハンガリー人ニコラ・キシユが十七世紀に設計した書体の復刻版。これは誤ってアントン・ジャンソンの活字だとされた書体だと、ハリー・カーターらが明らかにした。⁹⁾

① 十九—二十世紀が多くて全体の半数である。十七世紀の著作にも三点が選ばれている。

② 聖職者、詩人、思想家、学者、作家。特徴は古典主義者や社会主義者または宗教批判者など。

③ 詩歌・歌謡と小論・評論に集中。

④ 「著者の年代」「著者の分野・特徴」「ジャンル」の要素が強い。

■ スコッチ・ローマン書体

十八世紀後半のスコットランドで作られた書体が十九世紀にアメリカに渡ってこの名称を得た書体。イギリス製の活字では珍しくモダン・ローマンに分類。

① 十九—二十世紀が多い。

② 詩人と小説家で占められ、異国人著者が二名。歴史的・浪漫主義的傾向を帯びた著者。

③ 小論・評論に圧倒的に集中。

④ 「著作のジャンル」で一定の傾向が強く、「著者の年代」とも重なる。

■ コシヤン書体

十八世紀フランスで挿絵画家であったコシヤンが設計した書体の復刻版。エックスハイトが低く、上品で異色の書体である。

① 十八—二十世紀が多い。

② フランスの小説家に集中。幻想的、風刺的したがって批評的、神秘的な内容を得意とする著者が多い。

③ 主にフランスの恋愛小説で使用。

④ 「著者の年代」と「著作のジャンル」に深く関わる選択。

■ ベンボ書体

十五世紀末のヴェネチアでアルド（アルダス）が使った最初のオールド・ローマン体の復刻版。二百五十年ほどの間に影響を及ぼし、復刻版は二十世紀の書籍に多く使われた人気ある書体。

① 十九—二十世紀が多い。

② 詩人、劇作家、小説家、童話作家などで、警句・批評やリアリズムを得意とする著者。

③ 小説・物語、詩歌・歌謡、小論・評論とまんべんなく選択。

④ 万能的な書体でもあるが、私的批評という「著者の特徴」と関連。

■ フェル書体

十七世紀にオックスフォード大学の教授だったフェル博士がファン・ダイク設計の活字をはじめとするオランダの活字を調べて設計させた書体の復刻版。

① 十六—十七世紀に集中。

② 詩人と日記作家で、個人色が強く現れる内容か。

③ 詩歌・歌謡、小論・評論、宗教・哲学にも使用。

④ 十七世紀という清教徒革命から王政復古、国教統一などと宗教問題が吹きまくった時代の著者たちと合致。つまり、「著者の年代」と「ジャンル」との関係が際立つ。

(四) 使用主要書体の傾向——まとめ

右に調べた十書体の選択要素と傾向を点数化して以下にまとめてみる。傾向が最も強い場合を五点、傾向がやや見られる場合を三点、最も弱い場合を一点と設定した。

書体名	著者の年代	著者の分野・特徴	著作のジャンル
キャズロン	1	3	3
ブランタン	5	3	3
ギヤラモン	5	1	3
タイムズ・N・ローマン	3	3	3
バスカヴィル	3	1	3
ジャンソン	3	3	3
スコッチ・ローマン	3	1	5

表4: ジャンルと時代別にみる書体の使用(使用数上位10書体)

ジャンル	書体名	著者の年代(数字は世紀を表す)						合計	合計点	フェル	ペンボ	コシヤン
		古代	16-17	17-18	18-19	19-20	不明					
戯曲/歌謡/詩歌							小計					
キャズロン		1	5	1	3		10					
プランタン				1	9		10					
ギャラモン	1	3			1		5					
タイムズ・N・R			1	3	2		6					
バスカヴィル		1	1	3	1	1	7					
ジャンソン			1		2	2	5					
スコッチ・R			1				1					
コシヤン				1			1		34	5	3	3
ペンボ		2					2					
フェル		2					2	49				
小説/物語							小計					
キャズロン		1	1	1	1		4		18	1	1	1
プランタン					1	1	2					
ギャラモン	1			2	3	1	7					
タイムズ・N・R					1	1	2					
バスカヴィル					1	1	2					
ジャンソン					1		1					
スコッチ・R					1		1					
コシヤン	1		1		4	1	7		30	1	1	5
ペンボ				1	2		3					
フェル							0	29				
随筆/評論							小計					
キャズロン				2	2		4					
プランタン	1				1		2					
ギャラモン							0					
タイムズ・N・R			1	1	1	2	5					
バスカヴィル				1	2	1	4					
ジャンソン			1		2	1	4					
スコッチ・R		1		2	3	2	8					
コシヤン							0					
ペンボ					2		2					
フェル		1					1	30				
宗教/哲学							小計					
キャズロン	1						1					
プランタン	2						2					
ギャラモン	1	1					2					
タイムズ・N・R							0					
バスカヴィル							0					
ジャンソン							0					
スコッチ・R							0					
コシヤン							0					
ペンボ							0					
フェル		1				1	2	7				
その他(不明含む)							小計					
キャズロン				1	3	3	7					
プランタン		1			2		3					
ギャラモン	1				1		2					
タイムズ・N・R					1		1					
バスカヴィル							0					
ジャンソン			1		1		2					
スコッチ・R							0					
コシヤン							0					
ペンボ							0					
フェル		1	1				2	17				
合計		9	16	15	20	54	18	132				
割合(%)		6.8	12.1	11.4	15.2	40.9	13.6	100				

以上のことから、メネルの書体選択の根拠には常に著者の存在が中心にあることが確認できる。数字で見ると、「著者の年代」「著作のジャンル」が核となり、それに「著者の分野・特徴」が結びついていく様相を呈する。このことは、メネルの言動と重なる。つまり、「著者の言葉を肉体化すること」「書き手の目的への誠実な奉仕である」「書き手の意図を増幅したり」という、著者の存在こそが書体選択の核であるとの考え方が実際面で反映している。

また、著作のジャンル別の表4からは、キャズロン、プランタン、ギヤラモン、タイムズ、コシヤンの五書体はジャンルの中で特筆している。これを各ジャンルで見れば、次のようにまとめられる。

- ・戯曲と歌謡と詩歌では、キャズロン、プランタン、ギヤラモン、タイムズ、バスカヴィルの各書体が主流。
- ・小説と物語では、ギヤラモン、キャズロンの書体が多め。
- ・随筆と評論では、スコッチ、タイムズが目立つ。
- ・宗教と哲学では、キャズロン、プランタン、ギヤラモン、フェルの各書体。

(五) 使用少数書体の傾向―その他の書体

次に、表1の下端に見られる一回ないし二回しか使用されていない書体を表5の「少数選択書体とジャンル及び著者」を基に調べてみる。ここでは二つの大きな傾向がうかがえる。①著者の特質が注目され、年代とは一致しにくいものがある、②ジャンルで物語・宗教・解剖学を除けば、詩歌・随筆が大きな比重を占めている、ということにある。(この随筆とはエッセイのことだが、日本語の「思うところを気楽に記す」よりよりは、むしろ小論文にあたる。)

①については次のような見方ができる。例えばセントール書体は十五世紀後半のイタリア生まれの最初のローマン体ジェンソン書体をモデルとしているとし、その他のモデル書体は、アリギ書体では十六世紀初頭のイタリアで、マードーシユタ

表5: 少数選択書体とジャンル及び著者

書体名	ジャンル	作品数	著者名	著者年代
セントール&アリギ	詩歌/随筆	1	エリス	19-20
セントール	随筆・詩歌	1	マルキス	17
ダンテ	詩歌	1	F・メネル	20
	詩歌	1	テニスン	19
ベル	小説/物語	1	M・トゥウエイン	19-20
バルマー	小説/物語	1	ディケンズ	19
バルマー&カレドニア	詩歌	1	F・メネル	20
フライシュマン&ファン・ダイク	解剖学	1	ハーヴィ	17
フライシュマン&ルテシャ	詩歌/伝記	1	ハミルトン	19-20
ノイラント	宗教(創世記)	1	—	古代
ロムルス	詩歌	1	ベロック	19-20

イク設計ダンテ書体では十五世紀末のイタリアにあるし、ベル書体は十八世紀イギリスのR・オースティン、バルマー書体は同W・マーティンが設計した書体をモデルとし、アメリカ人ドゥイギンズ設計のカレドニア書体は十八世紀のオースティンの影響が濃い。

そして、フライシュマン書体は十八世紀のオランダの活字設計者の書体を下敷きにしており、ルテシヤ書体とロムルス書体のモデルは不明で、ルドルフ・コッホ設計のノイラント書体は独自の書体でモデルはない。したがって、これらの書体が著者の年代で十九―二十世紀に多いことは無関係であると言える。②のジャンルについては、書名と著作の内容その他の要素が関係していると推測できる書体が見られる。それが詩歌・随筆であることから、ここにはメネルの主観も影を落としやすいだろう。以下でチェックしてみる。

セントール書体とアリギ書体は、H・エリスの著作では説明的な批評的小論で選ばれている。エリス自身は十九から二十世紀にかけて生きた精神分析学者で、性心理学を専門としていた。カタログ中には、この企画の目的の一つは「一人の詩人への関心を再び呼び起こすことであり、この詩人(チャブマン―引用者)とジョン・ダンとの相性の良さが現代の詩的興趣の中で共感の響き合いを見出した方が良いと願っている」と、販売促進用見本パンフレットの広告文にある。(10)つまり、著者と内容に沿った書体選択と言える。同じくセントール書体を選んだのは、W・C・マルキス著の手紙と詩においてである。マルキスは十七世紀の法律家であり詩人でもあった。ここでの選択の理由は記述が極めて少なく、不明である。

イタリアの活字をモデルにしたダンテ書体は、メネルが二人の孫娘に宛てた詩を集めた個人的で記念碑的な内容と、十九世紀の桂冠詩人A・テニスンによる子供向け詩集である。どちらも子供が対象であることが共通している。前者の書名 *By heart* は、メネルの息子がシェイクスピアの偉大な言葉を記憶するように要求されたことについて書いた一片の詩(ピアトリアス・ウオード女史の作詩)から採用したとある。(11)シェイクスピアは十六から十七世紀にかけての戯作者で、古さという観点からの選択はありえる。後者では六世紀の伝説的人物アーサー王の作とされる田園詩であり、夭折の鬼才ピアズリーの挿絵図版が掲載されていて、古拙感と時代色と独特の郷愁を与え、若き日の記憶を呼び覚ませることに関連して、古典的書体として選ばれたのだろう。

モデルが十八世紀生まれのベル書体は十九世紀アメリカのリアリズム小説で有名なM・トゥウエインの『トム・ソーヤー』で選ばれている。ベル書体は十八世紀のイギリス生まれだが、アメリカで名付けられたスコッチ・ローマン書体の元を設計したR・オースティンが関わったことで、この活字が活躍した時代とアメリカという国柄で重なる。

また、十九世紀の詩人C・ディケンズの有名な二十四巻物、いわゆる「ナンサッチ・ディケンズ」の全集に十八世紀生まれのバルマー書体が使われている。この書体選択に関してはカタログ中にメネル自身の言葉が紹介されているので、次に引用する。

〔活字書体の引用者〕自覚した美しさ、それは楽しいほど自由である。(だが) 気取り、不自然さ、あるいは際立った特徴はそれ自体で望ましい場合もあるが、長文には不向きであろう。とりわけディケンズの著作物にはふさわしくない。ディケンズにおいてはその文体は彼独特のものだ。活字はこの人物の語調を変えないように中立であるべきだ。⁽¹²⁾

ディケンズの生きた十九世紀は印刷の暗黒時代であった。いわゆる「ヴィクトリア朝タイポグラフィ」と後世に呼ばれ、無秩序な活字によって印刷物の質が乱れていた。その世紀末にやっと近代タイポグラフィの夜明け前として技術改良が見られ、その新しい技術に裏打ちされた質の向上があっても、ディケンズの著作を印刷することがなかったという事実、メネルがディケンズの名誉回復を願う、十八世紀のイギリス生まれのバルマー書体で報いたようである。バルマー書体は黒味が明瞭で癖を抑制されかつ中立的であることから、著者の言葉使いや文体に適切だ。またバルマー書体の非個人的な特徴が、大部の全集の本文用書体として読者の眼精疲労や視覚馴致にも役立つこともあるだろう。書体選択において、メネル自身がこのように思慮深い対応を表明していることは注目に値する。なお、この「ナンサッチ・ディケンズ本」のデザインの細部は、ハリ・カーターの手になったとの解説がある。同じくバルマー書体はメネルの短い詩集にカレドニア書体とともに選ばれているが、その理由はわかりにくい。

フライシユマン書体とルテシヤ書体は、ハミルトンという編集者の手になる

ギリシャの詩集の英訳版に使用されているが、この場合のフライシユマン書体はギリシャ語版活字である。ルテシヤ書体はオランダ人ヤン・ファン・クリンベンが設計した独創的な活字であり、オランダの伝統を大きく刷新し、貴婦人を思わせて繊細でありまた大文字が際立つので、その使用は一般には広まらずに、むしろ特徴を色濃く演出する私家版印刷者に主に好まれた。ルテシヤ書体使用の根拠は「チャーミング」だと評判の詩やフランス人女流画家による素描画が、清楚で上品な姿のルテシヤ書体と重なる。

ロムルス書体もルテシヤ書体と同じくクリンベン設計だが、十九―二十世紀のドイツ人H・ペロックの十七歳の時の自選詩を組んでいる。ペロックは詩人で随筆家・歴史家・小説家で、反ドイツや反ユダヤ・反カトリック思想の持ち主。古代ローマの生んだ伝説の人物の名前を被した書体名に、伝説的で特異な人物との共通点があるとして選ばれたとの推測は、強引ではあるが、特殊性の故にあり得るだろう。

詩集関連以外では、三つの書体が使われている。フライシユマン書体はファン・ダイク書体とともに十六―十七世紀の解剖学者ハーヴィの著作で組まれている。血液循環説で有名な学者による動物の肉體機能の発見に関する内容には、十八世紀のオランダ生まれの活字彫刻師フライシユマンと同じオランダ人のファン・ダイクの活字の復刻版が選ばれているので、国が同じであることから、わかりやすい。

ノイラント書体は旧約聖書の『創世記』の第一章に関する木版画を描いた部分で短い文章や語句に組まれている。独創的書体でモデルのない活字を思い浮かべたメネルの発想は、木に荒く彫ったような硬く太くかつ黒々としたウェイトの書体が、ポール・ナツシュ描くシユールで硬質なスミ一色刷りの木版画と調和すると考えたのであろう。現にハリ・カーターは「古代の雰囲気」を伝えていくという感想を得たそうであるし、ドレイファスも「目の覚めるほどの実例だ」と、その書体選択を讃えている。この「古代」とは『創世記』を含むいわゆる「モーゼ五書」がまとめられた期間の紀元前十から同六世紀の時代であろう。木版画の特徴と時代が書体を求めたと言える。

ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTUVWXYZ
abcdefghijklmnopqrstuvwx**yz**
1234567890

ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTUVWXYZ
abcdefghijklmnopqrstuvwx**yz**
1234567890
VAN DIJCK
ファン・ダイク、MT Van Dijck

ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTUVWXYZÆ&
ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTUVWXYZÆ&
abcdefghijklmnopqrstuvwx**yz**zijaœ1234567890
ct fb ffi ffi fh fi fk fl fb fh fi fl ff ff ffi fl ft
ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTUVWXYZIJÆ&
A B C D J M N P Q R
abcdefghijklmnopqrstuvwx**yz**zijaœ
ENSCHEDÉ FLEISCHMAN
フライシュマン、Enschede Fleischman

ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTUVWXYZÆ&EQU&
abcdefghijklmnopqrstuvwx**yz**
1234567890 1234567890
LUTETIA
ルテシャ、Lutetia

**ABCDEFGHIJKLMN
OPQRSTUVWXYZ
1234567890**
ノイラント、Neuland

ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTUVWXYZ
abcdefghijklmnopqrstuvwx**yz** Z&
1234567890
ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTUVWXYZ
abcdefghijklmnopqrstuvwx**yz** Z&
1234567890
ROMULUS
ロムルス、Romulus

ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTUVWXYZ&
abcdefghijklmnopqrstuvwx**yz** 1234567890
ARRIGHI ITALIC OR CENTAUR ITALIC
アリギ、Arrighi Italic

ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTUVWXYZ
abcdeghijklmnopqrstuvwx**yz**
1234567890
CENTAUR
セントール、Centaur

ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTUVWXYZ
ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTUVWXYZ
abcdefghijklmnopqrstuvwx**yz**
ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTUVWXYZ
abcdefghijklmnopqrstuvwx**yz**
MONOTYPE DANTE
ダンテ、MT Dante

ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTUVWXYZ
abcdefghijklmnopqrstuvwx**yz**
ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTUVWXYZ
abcdefghijklmnopqrstuvwx**yz**
MONOTYPE BELL OR JOHN BELL
ベル、MT Bell

ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTUVWXYZ
abcdefghijklmnopqrstuvwx**yz**
1234567890
ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTUVWXYZ
abcdefghijklmnopqrstuvwx**yz**
1234567890
バルマー、MT Bulmer

ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTUVWXYZ
abcdefghijklmnopqrstuvwx**yz**
1234567890
ABCDEFGHIJKLMN**OP**QRSTUVWXYZ
abcdefghijklmnopqrstuvwx**yz**
1234567890
カレドニア、Caledonia

(六) 使用少数書体の傾向——まとめ

右の検証をまとめてみると、次のようにそれなりの書体選択の根拠または共通点が見られる。また、複数の要素が選択に関わっている。カッコ内は書体名。

- ・ 著者と内容（セントールとアリギ、ダンテ）
- ・ 図版（ダンテ、ルテシヤ）
- ・ 図版と時代（ノイラント）
- ・ 著者・時代（ベル）
- ・ 著者（バルマー、ロムルス）
- ・ 国（フライシユマン、ファン・ダイク）
- ・ 不明（カレドニア）

この範囲における整理からナンサッチ・プレスの出版物では、書体選択の主要な要素が著者である場合が五例、図版の場合が三例、内容の場合が二例、時代の場合が一例、国柄の場合が一例という結果を得られた。著者が多めでその特質・性格などの属性にあることは、やはりメネルの言う「書き手の目的への誠実な奉仕」つまり活字の本来の役割が基本として貫かれていると言える。著者の声を代弁するための器こそ書籍である、という信念でもあろう。

四. 結び

(一) 書体選択の主要な要素

以上、本文用に使われた上位十書体と一または二回の出版物にしか使われなかった十一書体での書体選択の根拠を検証してきた。この場合、対象は本文用だけでなく表紙や扉などで選ばれた書体は除外している。著作のジャンルについては、まだ類推に不正確なことがあるだろうが、当面の概要は把握できた。ここではそこから一定の傾向を総合的に捉えてみる。

著者が主要な要素であることが多く、その場合には、

- ① 著者の生きた「年代」とその著者の「特徴」
 - ② 著者の生きた「年代」と著作の「ジャンル」の特徴
 - ③ 著者の「分野」と著者の「特徴」
 - ④ 著者の「特徴」
- という五つの要素が関係していた。また、これらに

⑤ 「図版類」の特徴との調和

⑥ 「国柄」（国名とその地方色・風俗・文化）

という要素が絡み合っている事情が見られた。つまり、著者と何らかの部分で関連する事柄などが書体選択の主要な要素だと捉えて良いであろう。これらの要素を組合せるには、文芸出版社として当然ながら歴史・文化とりわけ文学への広範な理解が基本であり必須と言える。

ナンサッチ・プレスにおける本文用書体において、その選択の根拠がそれぞれに考えられていたことが見えてきた。書籍製作の一部であつてまた読者が最も意識しにくく識別もしにくい本文用書体だけでなく、分かりやすい部分としての書籍の外側である装幀（製本材料や表紙のデザイン）、扉のデザイン、それに本文用紙などの選択においても、何らかの選択の理由があつたと考えても不自然ではない。例えば、扉のデザインにおいてよく知られた逸話がある。それはメネルがアイザック・ウォルトンの著作集の製作に関して、一九二九年九月に手紙で「二十七回目の扉の校正刷りを得て、これでほぼよろうとした」と書き送っている⁽¹³⁾。一つの扉を決めるために、二十七通りもの文字組みを実際に組んで、壁に貼り続けて眺めて吟味したそうである。この種のメネルの行動は興味深く、まだまだ多くあるはずだ。今回本稿の基本参考書とした『ナンサッチ・プレスの歴史』をさらに詳細に読み込めば、メネルに関する逸話が多く得られるだろうし、別の多角的な視点からのテーマが浮かび上がり、いっそう深く理解できるヒントも現れるだろう。

活字書体の選択以外でも、花柄装飾活字の援用や挿絵の選択において、メネルは製作物全体に「隠喩」の香りを香水のように振りかけ漂わせてもいたようだ。先に紹介した「隠喩に富んだ印刷」の実践である。それは書き手の意図への共感を読者とともに味わうことであり、余裕とも言える一種の遊びの精神や仕事への喜びがなくては叶わない行為であろう。メネル自身が書き手の奉仕者としてさらには自身も含めた読み手への奉仕を仕事として飽かず楽しむ懐の広さが、ナンサッチ・プレスを支えていたのだろう。この納得を目指す執念の熱さまたは完成度の高さへの持続的集中力や粘着力は、ただならぬ性格の故だけでなく、書き手の言葉を視覚化するというタイポグラフィの本道の実践を目指す志の厚み故でもある。

(二) ナンサッチ・プレスの実戦を生かす道

書体選択におけるメネルの基本姿勢と実践から、我々が学べることをまとめてみる。我々は続々生まれてくる豊富な書体数と書体価格に戸惑いつつ、感覚的に無意識に自身の好みから選ぶことが常態化しているのではないか。その反省から次のようなヒントをメネルから引き出してみる。

第一は、入手可能な書体数に恵まれた現代の環境下での対処法である。メネルは当時続々と発表された書体を前に、単に入手可能だった多くの書体を使いこなしたのではなく、使用可能な書体の範囲の中から慎重に選んだと理解できる。書体数が問題なのではなく、一定の評価のある書体群を対象にすることが基本だったと考えられる。それにはクラシックな基本書体を熟知することから始まる (Changeとは必ずしも時代的に古いことあるいは「古典」だけではなく、高い評価の定まった優れた質を有することが基本にある)。読者にとつては見慣れた書体が文章を読み進む上での期待であるため、書体は背後に隠れることで意味の理解に集中させる黒子の役割に徹底できるからである。いわゆる「クリスタル・ゴブレット」説⁽¹⁴⁾だが、それは普遍的機能であり、たとえ新規さが目についても読み進むにつれて恙なく視覚の馴致度が増す機能とも言える。

だがそれだけでは対応できない例外がある。新しい書体や不人気の書体でも、書籍という思考や意思を表記した文章を収める器の総体の彩りに調和する演出のために必要となる。それは読む速さを相対的に遅めるが、それにふさわしい書体もまた期待される。メネルの出版物には挿絵が大きな要素となっていることから、挿絵との相性も考慮されている。また、詩歌などを味わうため読む速度を考慮する書体により、独特の雰囲気を漂わせることも求められる。ここに興味深い書体の役割を見出せる。つまり、基本としての書体の役割は長文の本文用と語句の意味を増幅させるディスプレイ用であるが、この中間的な位置付けとなる、絵柄や内容との共演という機能だ。それには続々と登場する書体へのアンテナを鋭く張る必要がある。また、たとえ不良と見える書体でも、それを生かせることもタイポグラフィアの役割の一つだろう。

第二は、著者への理解度であり、著作内容への興味である。これはタイポグラフィを担うグラフィック・デザイナーに共通の苦手な作業であり、また時間的な制約によって困難になりうる要素でもある。書き手が生きた時代環境への理解は、メネルの場合には重要であった。それは歴史への視線である。またその著者の境遇や文体の特色の把握も書体選択の主要な根拠となり得た。ここで

は読む行為の深さが必須となる。著者への愛情や興味がなければ不可能な作業であり、著者と静かに向かい合つての考察から生まれる内容の「再現性や追創造」こそ、適切な書体の選択でありタイポグラフィの核にあると言える。

メネルは「言葉への愛」という表し方を好んだという。言葉への理解力と感性が意味の整理力と結びれて書体を扱う行為が彼には見られる。印刷する中身の理解があればこそ、そこから書体選択への様々なヒントが見えてくる。

(三) 追記

本稿ではナンサッチ・プレスの代表者としてメネルだけを取り上げてきたが、彼と共に出版活動を支えた人物として、次の二人を忘れては片手落ちである。一人は企画を生み出し編集や経理をこなしたヴェラ・メンデルで、メネルの二度目の妻である。もう一人は小説家で文学に精通していることから出版物の選定に力を発揮したデイヴィッド・ガーネット。初期のナンサッチの出版物は、この三人の志から船出した。また、外部にはモノタイプ社で活字開発計画を推進していたS・モリスンと、同社の広報を担当していたB・ウォードがいた。この二人が援護者だったことは文献記述に散見されるので、その陰の助力の程は想像に難くない。

なお、この短期の調査ではジャンルの特定で誤読や不正確さもあり得る。そのためさらなる精査を加えて、一層の深い読み取りとメネルの深層に迫るだけの相応の時間が必要である。

註

- (1) 社名の由来については、「希望と謙遜が混じった気分選ばれた」というメネルの言葉が残っているが、「フランソワ一世の城に對抗して、アンリ三世が一五三八年に築城を開始した城の名前」と同じである。メネルは新しい印刷所の開設にあたり名称を決める際に思い出し、また印刷社マークを考える際にその城のタペストリー装飾を参考にした。さらに、タイポグラフィの専門用語ではナンサッチとは「ナンパレル」と同義で、六ポイント相当の活字サイズの名称である。ちなみに「ナンサッチ」にはまた一般的に「比類なきもの」という意味がある。著者のジョン・ドレイファス (John Dryfus 一九二二—二〇〇二) は印刷史研究家で、モノタイプ社ではモリ

スンの後を継いで活字設計の顧問を務めた。主著は *Into Print* (The British Library, 1994)。

- (2) 同右 Descriptive Catalogue, John Dreyfus, *A History of Nonesuch Press, with an introduction by Geoffrey Keynes and Descriptive Catalogue by David McKitterick, Simon Rendall & John Dreyfus* (The Nonesuch Press, London, 1981) pp. 175 – 264.
 Fransis Meynell, *The English Printed Books* (Collins, 1946) pp. 8 – 12
 John Dreyfus, *A History of Nonesuch Press*
 (3) 同右 p. 140
 (4) 同右 p. 19
 (5) 同右 p. 141
 (6) 同右 p. 140
 (7) ハリー・カーター (Harry Carter 一九〇一—一九八二) は活字及び印刷史研究家。主著は *A View of Early Typography: up to about 1600* (Oxford University Press, Oxford, 1969)。
 (8) 活字設計家のマシュー・カーター (Matthew Carter 一九三七—) 著。S・ギルソン著 *A Tally of Types: with additions by several hands edited by Booker Crutcheley*, (Cambridge at the University Press, Cambridge, 1973) の補遺におおむね「シャノン」と呼ばれる活字は「キシユが十七世紀に彫ったものだ」と報告した (pp. 117 – 22)。
 (9) それはすでに「ジョージ・パティとの共著」一九五四年に雑誌 *Linotype Matrix*, No. 18 に発表済み。なお「キシユについて」の詳細は「Horst Hederhoff による論文『The Rediscovery of a Type Designer: Mikolos Kis', *Fine Print On Type, The best of Fine Print Magazine on Type and Typography*, ed. Charles Beglow, Paul Dayden Duesing, Linnea Gentry, Bedford Arts, San Francisco, 1989, pp. 74 – 80 が参考になる。」
 (10) 同右 pp. 229 – 30
 (11) 同右 pp. 262 – 3
 (12) 同右 pp. 242 – 3
 (13) 同右 p. 212
 (14) モノタイプ社の広報担当だったビアトリス・ウォード女史 (一九〇〇—一九六九) が一九三二年に英国印刷者協会で講演した内容のタイトルで、当初は *Printing should be invisible* とされていた。

参考文献

- Kenneth Day ed., *Book Typography 1815 – 1965, In Europe and the United States of America*, edited with an Introduction by Kenneth Day, (The University of Chicago Press, Chicago, Ernest Benn Limited, London, 1966)
 Raymond Roberts, *Typographic Design*, (Ernest Benn Limited, London, 1966)
 Robin Kinross, *Modern Typography, an essay in critical history*, (Hyphen Press, London, 2004)
 コンプトン、加藤憲市・加藤治訳『英国史・英文学史』(大修館書店、一九九六年)
 吉田健一『英国の文学』(岩波文庫、岩波書店、一九九四年)
 夏目漱石『文学評論』(上)(下) (岩波文庫、岩波書店、一九八五年)
 河野三男「ナンサッチ・プレス(その一)」「舳板(サンパン)』第Ⅲ期 第6号、12月号 (EDI、二〇〇三年)、『同(その二)』第7号、同(その三)』4月号 (二〇〇四年) 第9号、1月号 (二〇〇五年)